

2025年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
教育学部	教授	山本かほる
最終学歴	学位	専門分野
愛知教育大学 教育学部 卒業	学士	国語科教育 教師教育

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

「いま」を意識し、理論と実践の有機的な結びつきを目指す教育活動

実務家教員として、学校現場での経験に基づいた実践知を学生に伝える役割を意識して日々の教育活動にあたっている。しかし、それらに理論的な裏付けがあるかどうか、一般化できる内容なのか、そしてもちろん「昔話」ではなく「いま」の話なのかを検証した上で伝えていきたい。

【目標】

「天に事うる職分」として教職のやりがいを伝え、教職へのモチベーションを向上させる。

「子どもが好き」「恩師のような先生に」という希望や夢をもって入学してきた学生も、昨今の「ブラック職場」「長時間労働」などの報道に接して自信を失い、途中で志を折ってしまうことが少なくない。特に教育実習の前にはどの学生も大きな不安を訴え、精神的に不安定になる学生もいる。

教職は多忙ではあるが、多くの教員が子どものために尽力することにやりがいと喜び、誇りを持っている。このような教職の現状を正しく理解させるとともに、学生が教育実習や教員採用試験に自信をもって臨めるように、基礎的な知見と実践力をしっかりと身に付けさせて送り出したい。そのために、教育実習事前事後指導や教職実践演習、教職特講・教職セミナー、教職概論の授業をさらに充実させるべく、授業の計画や内容、教材資料を工夫・改善していく。

【方針】

アクティブな学びを意識した授業手法を取り入れる

アクティブラーニングとは、単に活動を取り入れた授業手法ではない。学び手が自ら主体的に学ぶことで思考をアクティブにする学びである。学生が教員になった時に、従来の画一的な一斉授業ではなく、アクティブで個別最適な授業を実践してほしい。そのために、まずその手本となる授業を自ら実践してみせ、どんな学びがアクティブで個別最適なのかを体験的に学ばせたい。

また、教科教育法や教育実習事前指導・教職実践演習の授業では、学生に実際に教壇に立たせて模擬授業を行う。授業づくりのクリエイティブな喜びこそ、教職への最大のモチベーションとなるはずである。

【計画（方法）】

「真に信頼して教育を任せうる教師」としての自覚を培い、今の教育現場の実情に応じた、実践的な力を身に付けさせる。

【教育実習事前事後指導（前期）・教職実践演習（後期）】

教育実習では、実習生といえども、建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」にあるように、一人前の「教師」としての自覚が求められる。責任ある言動を心がけるよう、過去のトラブル事例も紹介しながら、危機感をもたせて具体的に指導する。一方、今の教育現場の実情に合わせ、タブレット PC や電子黒板を用いた授業手法も体験させて、実習が楽しみになるようなポジティブな気持ちで実習に臨ませる。

どの学生も不安を訴える実習での研究授業対策として、まず指導案作成を 1 対 1 の個別指導で徹底的に指導する。そして完成した指導案をもとに、実際の教室を模した形で全員に模擬授業を体験させ、少しでも現場に近い形で授業力を磨き、不安を取り除いて現場に送り出す。また、実習に向けての不安解消のために全員を対象として個別面談を行うとともに、事後面談も行い、実習の有効な振り返りを目指す。さらに事後指導の最後に、学生の自主運営による成果発表会を開催し、実習での自己の成長を実感させる場としたい。

教育実習や教員採用試験・院進学準備及び事務手続きについては「事前事後指導の手引き」に一括掲載してワンストップで一貫指導し、学習する上での煩雑さを解消する。

後期の教職実践演習は、4 年間の教職課程での学びの総仕上げである。履修カルテを完成させて 4 年間の振り返りを行わせるとともに、指導案作成・模擬授業を再び実践させ、教育実習前の自分と比較することで、各々の成長と課題を実感させたい。

【教職特講（面接・論文講座 前後期） 教職セミナー（後期）】

教職特講では、論文・面接対策を担当している。自作教材「面接の教科書」「論文の教科書」を最新版に改訂して活用し、繰り返し学ばせたい。また、論文・面接対策の基礎として必要な、教職教養の知識や最新の教育課題についての資料集も改訂し、活用したい。受講生一人一人が受験する自治体ごとに過去問をまとめた資料も作成・配付し、学習が効率的にできるようにしていきたい。

例年、初等教職課程 3 年生全員を対象とした教職セミナーを 2 月に予定している。特講生以外の学生にとっても、教採について学び、面接などを実体験する貴重な機会となるため、配付資料や外部講師の一層の充実を図りたい。

【教職概論（後期）】

昨年度はコマ数の関係で担当できなかったが、今年度再び担当できることになった。ただカリキュラムの関係で、従来の小学校教員志望者のみが対象ではなく、幼・中・高志望者も対象となったため、ニーズに答えられるよう内容を大幅に見直す必要がある。しかしながら、教職に関する歴史や理論・用語を、今まさに現場で起こっていることと結びつけ、「自分がもし担任だったら・・・」と、自分ごととして考えさせながら理解させる必要があることは、どの学校種でも変わらない。若手教員の生の声を紹介してそれについて考察・発表させたり、「教育に正解はない」ことを実感させつつ討論などの対話的な学習を取り入れたりして、アクティブな学びをめざしたい。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

サービス・ラーニング実習Ⅰ、基礎演習Ⅰ、教育実習Ⅱ（小学校）、
教育実習事前及び事後の指導（小学校）、国語、教職特講（論文・面接対策）

（後期）

サービス・ラーニング実習Ⅱ、基礎演習Ⅱ、教職実践演習（幼・小）、
国語科教育法 教職概論、教職特講（論文・面接対策）

○教育方法の実践

「教育実習事前事後指導」(前期)

教科書となる「教育実習Ⅱ事前事後指導の手引き」に今年度も改良を加えた。特に、例年実施される名古屋市教育委員会・愛知県教育委員会の実習打ち合わせ会で示される注意事項や実習受け入れ校からの指摘事項は不祥事のニュースなどを受け毎年厳しくなっているため、実習に向けた心構えの内容については特に注意してアップデートした。また、指導案作成については昨年度に引き続き1対1で、個別対面で実習生と対話しながら十分に時間をかけて指導した。模擬授業とその事後検討についても2クラスに分けて行うことで時間をかけて丁寧に行った。IT活用としてロイロノートについての演習・講義も、外部講師を招聘して2コマにわたって行った。

学生が最も緊張し、またミスも危惧される実習校との関わりや煩雑な書類作成については、分かりやすくマニュアル化し、1冊の手引きで実習に必要な実務と学習が全て網羅されるようにした。また「働き方改革」の影響で、実習日誌などの簡略化・指導案の簡素化についての学校現場からの要望はますます厳しくなっており、昨年度に引き続きいっそうの改善を行った。

実習前はどの学生も大きな不安を抱えている。そのため、時間をかけて個別面談を行い、実習生の不安な点や疑問を丁寧に傾聴・アドバイスした。実習後にも個別面談を行い、実習を振り返って今後の成長につなげるとともに、今後の教員採用試験対策や進路についても話し合った。

令和4年度まで連続2年間、実習不合格者が1名ずつ出ていたが、令和5年度からは一人も出していない。今後とも全員が実習をクリアし、教員免許を取得できるよう、サポートしていきたい。

「教職特講」(前期)(後期)

4年生を対象とした前期「教職特講」においては、5名が採用試験合格を勝ち取った。自治体別に作成した過去問集、教育時事を分析して作成した対策資料や、2次の面接対策をマンツーマンで一人あたり6時間以上集中して行ったことが奏功した。しかし、一つの自治体しか受験しない学生や1次合格したにもかかわらず辞退した学生も数名おり、受験自治体の選定やその後の指導については課題が残った。昨年は4名いた大学院進学者は、事前に十分に周知したにも関わらず今年度は0で、採用試験不合格者は講師としてすぐに現場に出ることになった。

採用試験後の学生からは、

「2次試験の面接の質問は、すべて大学で指導された過去問と同じだったので、準備していった通りに答えればよく、面接を楽しむ余裕も生まれた。」

「小論文は特講で習った書き方通りに書いたもので、時間内にすらすらと書けた」

「どの面接官も山本先生よりも優しく感じられたので、リラックスしてできた。厳しく指導してもらって良かった。」

との声が聞かれている。

昨年度は人間健康学部で小学校受験を希望する学生の対応が課題だったが、今年度は特に希望を聞かなかった。しかし、今後も早めに学部間で情報を共有し、小学校を受験する学生がいれば、教育学部生に遜色のない2次対策ができるよう心がけたい。

2年生を対象とした後期「教職特講」については、来年度に教員採用試験に3年生で受験する予定の2年生を対象として昨年度立ち上げた講座である。1次試験のみの受験だが、愛知県も名古屋市も小論文試験は1次で実施されるため、書き方の基礎的なスキルを数回レクチャーした後過去問や予想問題を多めに渡し、書けた学生が申し出てその都度個別に面談しながら添削する方

式をとった。学生の自主性に任せた形だが、まったく書いてこない学生もおり、今後の課題となった。

3年生を対象とした後期「教職特講」は、来年度4年生で受験する3年生対象の講座である。まず基本的な教職教養の知識や、現代的な教育課題についての考え方、面接・論文の基礎的なスキルを学ぶことからスタートした。スタート当初は、基礎的な学力の差が目立ったが、年度末に近づき知識やスキルが身につけてくると、どの学生も自信をもって演習に臨めるようになってきた。

「基礎演習Ⅰ」（前期Ⅰ年生ゼミ）「基礎演習Ⅱ」（後期Ⅰ年生ゼミ）

例年、TEAMS を使いこなせなかったり教員や大学からの連絡を見なかったりして、単位取得が危うくなる学生が少なくないため、前期基礎演習では、「楽しく充実した大学生活のために」というパワーポイント資料を作成し、これらについて指導することからスタートした。その後、他の担当教員と何度も話し合っって指導計画を立て、

- ・絵本についての講演の後、自分が選んだ絵本で「本の帯」作成
- ・知育玩具ジナゾルについての講演
- ・うりんこ観劇会
- ・愛知児童総合センターの見学

など、座学以外の活動的な内容に取り組んだ。「本の帯」では、自分が学校現場で小学生に指導した経験を活かし、昨年に引き続きパワーポイント資料を作成・指導した。学生による意欲の差はあったものの、座学では見られないいきいきとした様子が見られた。しかし、前期の終わりごろになると、修学意欲の低下による欠席や遅刻が目立つようになってきた。保証人との面談や個別面談を何度か行い、悩みなどの相談にのったり一緒に課題を作成したり欠席しないよう励ましたりし続けたが、結果として修学意欲の消失による退学者1名、転学部希望者1名を出すことになってしまった。

後期基礎演習では、学園祭の「キッズ広場」の取組みが主となった。リーダー的な素質のある学生の活躍もあり、当日は地域の子どもたちを迎えて楽しいイベントとなった。東山動植物園にも見学に出かけ、絶滅危惧種の動物を通してSDGsについて学んだ。しかし、日程調整にミスがあり、一部学生のサービスマーケティングの運動会ボランティアと重複してしまったため、今後は教員どうしの情報共有に留意していきたい。

「国語」（前期）

教科指導においては、

- ① 何のために（教科の目標）
- ② 何を（教科の内容～この教科でつけたい資質・能力）
- ③ 何で（教材論）
- ④ どのように（指導法）

の4観点から考える必要がある。そのうち、前期「国語」は、教師としての基本である学習指導要領の読み取り方を学んだ上で、①（国語科の目標）②（国語科の内容～国語科でつけたい資質・能力）について学ばせる。後期「国語科教育法」では、この基礎を踏まえて③（国語科の教材論）④（国語科の指導法～指導案作成・模擬授業の実践）を学ぶ。今年度は特に前後期の連続性を意識し、後期に指導案を作成する教材について簡単な授業構想を作成させた。ICT機器の活用については、文学教材の授業でのタブレットの効果的な使用法を授業動画を見て学んだり、デジタル教科書の活用講座を設定し、ゲストスピーカーを招聘して、実際に国語のデジタル教科書进行操作したり、活用方法を考えたりする学習を行った。

「国語科教育法」(後期)

前期で身に付けた学習指導要領の基礎知識を踏まえ、まずは、指導案についての基本的な知識をしっかりと身に付けさせることから始めた。指導案各項目の意義や用語解説に3コマを費やし、さらに「指導案の間違い探し」を行い、学生が陥りがちな指導案作成の勘違いやミスについて押さえ、知識・技能面での万全を期してから指導案作成・模擬授業に臨んだ。その結果、国語科指導案を作成させて添削指導を行う際には、用語の誤りなどの基礎的なミスが減り、内容面の指導に注力することができた。

今年度は受講人数が15名と少なかったため、模擬授業は黒板を使った全体授業にした。グループ形式では1人あたりの授業時間は充分とれるが児童役は2~3人となってしまい、多様な児童を想定した授業ができないためである。一方全体授業では、1人あたりの授業時間が15分から20分で展開部分の途中までとなってしまいが、児童役は授業者以外の全員で実際の授業に近い形となり、板書もできる。このようにグループ別模擬授業・全体での模擬授業、それぞれ一長一短があり悩ましいが、来年度は

どうするか引き続き検討材料としたい。

授業者以外の学生にも毎時課題として全員に指導案を作成させたので、模擬授業で学んだことが活かされ、毎回内容が向上していった。子ども役の学生は子どもになりきり、しばしば笑い声も響く楽しい雰囲気だった。指導案のPC作成について学生のスキルの差が大きかったため、初めのうちは手書きも可とし最後だけPC作成を義務としたところ、全員がWordで指導案を作成することができた。

どの学生も授業力を身に付けようと前向きで、模擬授業の授業者に誰一人欠けることなく取り組むことができた。指導案を添削・返却する度に学生の力量の伸長を実感するとともに、学生の指導案や模擬授業から自分自身新たな発見もあり、共に成長できた半年だったように思う。

「教職概論」(後期)

一昨年度まで担当していたが、今年度再び担当させていただくことになった。しかし、これまでとは違い、幼児コースの学生や人間健康学部の教職志望の学生も対象となったため、幼児教育の内容や幼稚園現場での課題、中学校・高等学校の現状や保健体育教員の悩みなど、現場の教員から情報収集やリサーチを新たに行った上で授業づくりを行った。

内容としては「学校=ブラック職場」とする昨今の言説やいじめ・モンスターペアレント、ICT活用教育や多様性への対応、働き方改革、新学習指導要領策定の動き等現代的な教育課題についての知識・知見を伝えた上で、具体的な事例を取り上げ、考察させる授業を行った。教材としては、教職に関する基礎的な知識や理論、文部科学省や関係機関から発表された最新データ及び教育問題についての報道を踏まえつつ、現場のリアルな話や悩める教師の生の姿を取り上げたパワーポイントや動画教材を作成した。

受講人数が30名以上いたが、毎回全員の提出課題にできるだけ多くのコメントを記入し返却するようにした。「コメントが楽しみ」「励みになる」と好評だった。

○作成した教科書・教材(改訂も含む)

基礎演習 I

パワーポイント教材「楽しく充実した大学生活のために~メール・TOPOS TEAMS を使いこなそう」

パワーポイント教材「本の帯って？」

前期「国語」

パワーポイント教材「国語」

水筆による毛筆実習教材

後期「国語科教育法」

パワーポイント教材「国語科教育法」

学習資料

「国語科指導案作成例集」A 細案編 B 略案編

「国語科指導案 間違い探しワークシート」

「模擬授業事前・事後検討会 グループマニュアル」など

後期「教職概論」

パワーポイント教材「国語科教育法」

教育実習事前事後指導

学習資料「教育実習 事前事後指導の手引き」全 60 ページ

「学校ってどんなところ？」

「子どもとどう向き合うか」

「示範授業のどこをどう見るか」

「実録！ 教育実習事件簿」 等

「指導案例集（新学習指導要領対応）」（名古屋版）（愛知県版）

「教育実習ノート」

「教育実習日誌」

教職特講

「教員採用試験 面接の教科書」

「教員採用試験 論文の教科書」

「面接・論文用学習資料&面接想定質問集～人物を問う質問 編」

「面接・論文用学習資料&面接想定質問集～教育観を問う質問 編」

「面接・論文用学習資料&面接想定質問集～教職教養を問う質問 編」

「各自治体の面接・論文過去問集 最新版」

名古屋編・愛知編・山梨編・福岡編・静岡編・長野編 青森編・熊本編・福井編

「個人面接相互評価表」「集団討論相互評価表」「場面指導相互評価表」「小論文相互評価表」

○自己評価

どの授業でも、可能な限り座学だけにならないよう、学生の思考・感情を揺さぶり、「自分ごと」として考えさせ、学生の頭の中を常に「アクティブに」する参加型の授業を心がけてきた。毎回授業で記述させた感想などから、ほぼ達成ができたのでは、と感じている。

しかし、最近では大学が実施する授業評価アンケートの対象からどの担当授業も外れており、昨年まで行ってきた独自の授業評価アンケートも時間数の関係で実施しにくくなっているため、数値的な客観的評価をどのように調査し、PDCAによる授業改善に努めるかが、現在の課題となっている。

II 研究活動

○研究課題

国語の授業でアクティブな学びを実現するために「この授業でどんなことばの力をつけるのか」を、学習指導要領や指導書を読みこなしつつどのように明確にするか、またそのための指導案作成をどのように段階的に指導するか

○目標・計画

【目標】

学習指導要領に示された国語科の「内容」を踏まえて、「この授業でどんなことばの力をつけるのか」を明確にした国語の授業を実践する力を身に付けさせる。

小学校では全学年で毎日国語の時間があり、教科の中では一番時間数が多い。教科担任制が導入されている小学校でも、国語の授業は担任が担当するケースがほとんどであり、そこに好悪や得意不得意と言った選り好みは一切通用しない。国語の授業は、教科書を読ませて新出漢字を練習させるだけでも一応授業の形は成立してしまうが、国語力とは何か、国語科でつけたい資質・能力は何かを把握した上で、この単元、この1時間で「どんなことばの力をつけるのか」を見据えて授業に臨まなければ、国語力を伸ばす授業はできない。

【計画】

「国語」「国語科教育」の授業において、以下のような手立てを研究・工夫する

【国語（前期）】

後期「国語科教育法」の基礎段階として、まず学習指導要領から、各学年、各教材で「どんなことばの力をつけるのか」を読み取れるようにする。そして、漢字指導・書写指導を中心とした言語事項のミニ模擬授業からはじめ、文学教材・説明文教材・詩教材・「聞く・話す」教材など様々なジャンルの国語教材を取り上げ、常に学習指導要領に立ち返りつつ、簡単な授業構想を作成させる。今年度は授業評価アンケートの学生の声を取り入れ、授業構想をPCで作成できるように工夫したい。また、デジタル教科書の操作も体験させ、ICTを活用した授業実践につなげたい。

【国語科教育法（後期）】

前期「国語」で作成した授業構想を基にして指導案を作成させ、さらにその指導案をもとに模擬授業を実践する。指導案作成の際には、新学習指導要領で求められる国語科で目指す資質能力、「見方・考え方」を、単元や授業の目標にどのように落とし込み、学習活動を設定するか、指導上の留意点に活かすか、そしてそれをどのように評価するかを考えさせる。そしてよくできた指導案を取り上げてフィードバック・共有し、児童観・教材観・指導観を育てたい。指導案をもとにした模擬授業では、全員が授業者となり、めざす資質能力を身に付けさせるにはどのような手立てが有効か検証させる。

○2018年4月から2026年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・白井克尚 今津孝次郎 山本かほる 他『教員養成におけるアクティブ・ラーニングの実践研究』唯学書房 2024年
- ・西崎有多子 山本かほる『「資質能力目標」明確化による授業改善試案－この授業で何ができるようにするか』東邦学誌第48号第1号 2019年

（学術論文）

(学会発表)

(特許)

(その他)

- ・山本かほる『初任者研修 研修資料集』2019年
- ・山本かほる『小学校教員採用試験 面接・小論文対策資料集』2025年

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

日本国語教育学会

○自己評価

授業実践や指導案作成における自分の基本理念は、2019年東邦学誌第48号第48号第1号に西崎有多子教授と共著で記載した論文『「資質能力目標」明確化による授業改善試案－この授業で何ができるようにするか』で述べたように、1時間の授業の中でどんな力をつけたいのか、目標とする「資質・能力目標」を明確にすることである。

国語科のアクティブラーニングのあり方を追究する中でも、1時間の授業の中でどんなことばの力をつけたいのか、という国語科における「資質・能力目標」を明確にすることを意識して研究し、「国語」「国語科教育法」でも演習を通して、このことを教えてきた。また、教育実習の事前指導や教職実践演習での模擬授業でも、達成すべき資質能力目標を具体的な子どもの姿で説明できるように指導してきた。

2030年の新学習指導要領の施行に向けて現在中教審で改訂審議中だが、つけたい資質能力の大元になる学習指導要領の内容が今後どうなるかを、国語科を中心に注視していきたい。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

教職をめざす学生を増やすための様々な取組みのさらなる向上をめざして教育学部の将来像につなげ、今後の大学運営に資する

新1年生のほとんどが、本学教育学部を選んだ動機として1年次からのサービ斯拉ーニング実習の魅力を挙げる。今年度も名東区小中学校長会や名古屋市教育委員会と一層密接な関係を築き、さらなる連携の強化をめざして学生の活動機会を増やすとともに、2026年度からスタート予定の2年生以上の「フィールドラーニング」授業の構想を具現化し、本学教育学部のさらなる魅力として発信できるようにし、大学運営に貢献していきたい。

また、教職を真剣にめざす学生を徹底的にサポートする教員採用試験対策特別講座も本学の強みとなっている。その強みを積極的に発信して教職をめざす高校生の心をつかむ方策を考え、教育学部の将来像につなげていきたい。

なお、昨年度担当した高校への出張講座が好感触だったので、今年度も機会があれば担当させて

頂き、「大学の授業でもこんな身近な課題について、楽しくアクティブに学んでいる」ということをアピールし、本学の魅力発信の一翼を担いたい。

【計画】

学校現場のニーズをふまえた計画

名古屋市立小学校で教職についていた経験や人脈をもとに、名東区小中学校長会と緊密な連携をとりつつ、順次各校を訪問して本学の取組みへの理解を得ることとする。訪問においては、各校長との懇談から学校現場の行事予定やニーズを把握した上で、連携強化の協力を要請したい。また、昨年度まで派遣していなかった小学校にも働きかけ、学生の活動の幅をもっと広げることも目標としたい。

教員採用試験対策特別講座についても、実務家教員として現場の最新情報を取り入れた内容を計画し、本学を卒業して現場に立つ学生が、より高い教師力を発揮できるようにし、本学のブランド価値向上の一端を担いたいと考えている。

○学内委員等

教育学部部会委員長

教職支援センター運営委員会副委員長

サービスラーニング運営委員会委員

○自己評価

教職支援センター運営委員会副委員長として、教職支援センターと教育学部との円滑な連携をはかるため、限られた両委員会の時間内ではあるが、それぞれの内容をできるだけ具体的に報告し、意見交流ができるよう腐心してきた。とりわけ、教職支援センターで主催する学生向けの諸講座はいずれも有意義な内容であるため学部にて丁寧に周知するとともに、TOPOSやTEAMSの告知を見逃す学生が多いことから、配付用案内プリントを作成して授業内で直接配付するようにした。これらの講座について昨年度までは教育学部教員の参加はなかったが、今年度は数名の教員も参加し、連携が深まったと感じた。

2月に「教職セミナー」を企画し、終日開催で実施した。オリエンテーションで、教員採用試験に向けた心構えや実際の出願手続き、教員採用試験をめぐる動き、願書の書き方をレクチャーした後、愛知県・名古屋市で実際に面接官を経験した元校長数名を外部講師として、志望自治体ごとのグループに分けて個人面接演習、場面指導演習を実施した。志望自治体の面接・場面指導の過去問をあらかじめ渡して予習をさせたことが奏功して充実したセミナーとなり、受講学生からの高評価（事後アンケート評価 平均4.9/5点）を得た。

昨年度から拝命した教育学部委員長としては、自分の担当する小学校教育実習だけでなく、幼稚園実習・保育実習・施設実習・介護等体験の円滑な実施に向けた調整・検討に努めた。また、今年度1年生から新たに取得できることになった中高保体免許についても、新たな議題項目として設定し、協議できるようにした。

サービスラーニング運営委員会委員としては実習に向けた心構えの指導と、小学校との連携を担当した。名東区内の小学校との連携や、名古屋市教育委員会の土曜学習いきいきサポーター参加者募集・支援を通して、学生の活躍の場を増やすことができた。また今年度新たに、熱田区白鳥小学校と連携し、6年生の探究学習におけるボランティアの場を設定することもできた。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

地域に対する本学のクレドに基づき、地域との連携・貢献の向上・進化をめざす

地元の平和が丘小学校に教務主任として数年間勤務し、平和が丘学区連絡協議会と密接に関わった経験や、名古屋市教育委員会で勤務した経験を活かし、人脈のいっそうの開発や地域との連携強化に貢献したい。

【計画】

名古屋市、特に名東区内の諸団体・関係機関・市立小学校と積極的に交流し、学生の諸活動への参加が円滑にできるようにする。

サービスラーニングの内容充実を図り、市内小学校、特に区内小学校との連携を図る。特に、名古屋市教育委員会からの最新の通知・情報などを踏まえ、諸活動に参加する学生に、地域の実情や注意点を伝えていき、活動が円滑・効果的に進むよう支援していく。活動に参加させるにあたっては、本学校訓「真面目」を体現させるため、服装・態度・あいさつなど、本学を代表して参加する自覚をもたせるよう、事前指導に力を入れたい。また、サービスラーニングの一環として例年参加している「なごやいきいきサポーター」の活動についても、学生向け説明会にオブザーバーで出席して教育委員会担当者の話を直接聞き、市教委と密接に連携しつつ、積極的に関わっていきたい。

これらの努力により、本学のブランド価値向上の一端を担いたいと考えている。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

サービスラーニングにおける名東区内小学校へのボランティア派遣・名古屋市教育委員会事業の「名古屋市土曜学習いきいきサポーター」のとりまとめ役として、各学校・教育委員会との交渉・調整にあたり、以下の行事に学生ボランティアを派遣した。また、区を超えて新たな活動先として新たに熱田区白鳥小学校を開拓した。

前期

5月 運動会準備

猪子石小学校 平和が丘小学校 北一社小学校 本郷小学校

後期

10月 学習発表会・作品展運営補助

猪子石小学校 極楽小学校 猪高小学校

11月 探究学習補助

白鳥小学校

通年 名古屋市土曜学習いきいきサポーター

二城小学校 藤が丘小学校 春岡小学校 大宝小学校 八事小学校 八幡小学校

中小田井小学校 なごや小学校 清水小学校 豊岡小学校 平和小学校 砂田橋小学校 岩塚小学校 枇杷島小学校 牧野小学校 西築地小学校 東丘小学校

荒子小学校 自由が丘小学校

○自己評価

名東区内小学校へのボランティア派遣については、4月当初に名東区校長会会長（上社小学校 井本孝男校長）を訪問してサービ斯拉ーニングについてのご理解を得て、区内小中学校の行事予定を知ることができたため、交渉を円滑に進めることができた。各学校の担当教員を決めて学生の事前指導を数回に分けて念入りに行い、当日も担当教員が手分けして現地に出向いて指導した。

「名古屋市土曜学習いきいきサポーター」のとりまとめについては、応募締切りが4月中旬と早いため、今年は入学式直後に呼びかけを行ったところ、これまでよりも多数の学生が登録し、派遣校数も2倍近く増えた。名古屋市教育委員会指導室の担当指導主事と連携を図り、学生向け活動説明会にも出席して、円滑な学生派遣を心がけた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

所属する日本国語教育学会の機関誌「月刊 国語教育研究」の購読や学会名古屋支部の研究集会参加により、最新の国語科教育の動向について学んできた。いまの学校現場の現状や諸課題を知り、自分の実践知を常にアップデートするため、現職教員との交流を心掛け、情報収集に努めた。

とりわけ、教職概論の授業で新たに人間健康学部の中高保健体育教員を志望する学生を対象とする授業を担当するにあたり、中学校や高等学校の現職教員から、現場の状況や課題について学び、授業内容に反映することができた。

VI 総括

昨年度に引き続き、教員採用試験の早期化や試験内容の改編などの動きが激しく、特に3年受験や大学推薦を希望する学生への指導や対応に追われた1年だった。常に最新情報の収集・対応に努めたが、教職支援センター、学部教員の皆様の温かなご指導・ご高配を得て、ここまで過ごすことができた。とりわけ、教務課のスタッフのみなさまには感謝したい。

目の前には教育学部の志願者の伸び悩みという厳しい現実がある。学部の将来像をどうするか、大学の魅力をどのように創出しアピールしていくのか、その中で実務家教員として自分にできることは何かを常に考え、それらを踏まえて学部の先生方・大学スタッフの方々とともに、今後も最善を求めて尽力していきたい。

以 上